

周囲の正常組織との比較で、病変部への tracer の集積を、集積なしから顕著な集積までの 4段階で評価し、clearance delay の有無を観察した。clearance delay を認めたのは悪性病変 5例、良性病変 1例の計 6例であったが、症例数が少なく、その組織診断に明らかな傾向は認められなかった。

病変が四肢にある場合は、周囲筋組織の運動による生理的集積で修飾されることや、撮像方向の再現性などに問題が残った。

14. 骨シンチグラムにおける頭蓋骨びまん性陽性集積の成因についての検討

吉岡 清郎 福田 寛

(東北大・加齢研・機能画像)

山田 健嗣 (仙台厚生病院・放)

骨シンチグラムにおいて時に認められる頭蓋骨びまん性陽性集積につき、出現の性差・年齢差を調べることによりその成因を検討した。551例の骨シンチグラムを対象とし、頭蓋骨びまん性陽性集積の出現頻度を男女別に10代ごと80歳代まで集計した。

頭蓋骨びまん性陽性集積は、男性では60歳代2.5%、70歳代3.2%、80歳代10.0%に出現し、60歳未満にはまったく認められなかった。女性では40歳代から出現し25.0%、50歳代70.7%、60歳代60.9%、70歳代53.7%、80歳代25.0%に認められた。陽性集積は男性に比し女性で明らかに多く出現し、女性での出現率は50歳代で急激に上昇する。この結果は閉経後ホルモン状態の変化による骨ミネラル変動を表すと考えるのが自然と思われる。

15. 分化型甲状腺癌の¹³¹I治療成績

—長期生存例の検討—

丸岡 伸 山崎 哲郎 後藤 靖雄

坂本 澄彦 (東北大・放)

中村 謙 (国立仙台病院・二放)

¹³¹I治療導入時からの観察期間が10年以上経過した分化型甲状腺癌35例(平均年齢52.7歳)のうち、10年以上の長期生存を認めたものは13例(平均年齢34.5歳)で、治療回数は1-17回(平均6回)、¹³¹Iの投与量は

3.7-71.65 GBq(平均25.48 GBq)であった。年齢別では40歳未満の10例中9例、40歳以上の25例中4例であった。組織型別では乳頭癌の16例中7例、濾胞癌の19例中6例であった。転移部位では肺10例中7例、肺骨3例中0例、骨12例中2例、リンパ節9例中4例であった。40歳未満、微細結節型肺転移で長期生存例が多く認められ、40歳未満の乳頭癌肺転移例は4例全例が10年以上の長期生存をしていた。骨転移例でも¹³¹I治療を定期的に行うことにより長期生存の得られる例も認められた。

16. 甲状腺腫瘍に対するエタノール注入療法

中駄 邦博 加藤千恵次 鐘ヶ江香久子

伊藤 和夫 古館 正従 (北大・核)

甲状腺全摘後の再発乳頭癌で¹³¹I治療が無効であった8症例と、切除困難と判定された原発乳頭癌1症例に対しエタノール注入療法(PEIT)を施行した。現在まで治療効果の判定が可能な8症例13病巣に関しては76.9%(10/13)がPR以上になった。また、PEITの2週間後に喉頭全摘術が施行された1例では推定体積14cm³に対しエタノール注入量は6mlであったが、摘出標本では腫瘍の約50%弱が壊死に陥っていた。PEITの副作用として酩酊感、注入時の痛み、漏出したエタノールによる神経障害etc.がみられたが、対症療法で軽減が可能であり、現段階ではpalliative therapyの域をでないがPEITは有効な方法であると思われた。なお、囊胞を有する症例にもPEITを試みたところ3~4か月後には完全消失が認められ、今後良性腫瘍にも応用が可能と考えられる。

17. ²⁰¹Tl-^{99m}Tcサブトラクションシンチグラフィによる異所性副甲状腺の局在診断

鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 加藤千恵次

永尾 一彦 中駄 邦博 藤森 研司

古館 正従 (北大・核)

副甲状腺機能亢進症は大きく一次性和二次性に分類されるが、手術操作による侵襲や持続性機能亢進、ならびに再発を防ぐ点で術前にその局在を確認することは重要である。異所性の腫大に対しては²⁰¹Tl-^{99m}Tcサブトラ

クションシンチグラフィ(TTS)は他の画像診断より有効とされている。異所性のうち胸腺内1例、縦隔内3例の副甲状腺腫大について検討したところ、縦隔内でTTSでのみ診断がつき4度目の手術でようやく切除に至った1例を経験した。Sensitivityは75%であった。異所性副甲状腺の局在診断に対しTTSは有用であった。

18. 肝細胞癌のTAE施行時における^{99m}Tc-GSAアシロシンチの有用性

鎌田紀美男 (函館医師会病院・放)
西 直子 木村 環 樽沢 孝二
淀野 啓 竹川 錠一 (弘前大・放)

肝細胞癌23例に対して、TAE施行前の肝予備能評価として^{99m}Tc-GSA scanを施行したところ、conventionalなlabo. dataである総ビリルビン、PTとはあまりよい相関が得られなかつたが、albumin、ChE、HPT、ICG R_{max}とは比較的よい相関を示し、肝予備能の総合評価の一翼を担うものとして今後期待された。

また、9例に対してTAE施行前とTAE後3~4日にて^{99m}Tc-GSA scanを施行したところ、HH₁₅の値は有意の改善を示し、LHL₁₅の値は改善の傾向を示した。この原因として、腫瘍血管塞栓による相対的な正常肝細胞への血流回復、肝動脈閉塞による代償性の門脈血流の増加等が考えられた。

19. ^{99m}Tc-GSAの体内動態の食事による影響

加藤千恵次 鐘ヶ江香久子 永尾 一彦
中駄 邦博 藤森 研司 伊藤 和夫
古館 正従 (北大・核)

16例の正常肝において空腹時、食事負荷後のGSAの肝集積曲線をモノコンパートメント解析し、肝集積量Co、集積初速度Do、摂取係数Kuを算出し比較検討した。肝集積量Coは体表面積と相関を認め(p<0.001, r=-0.77)、補正式を導き補正值Co', Do'を算出した。Co'は食事負荷による有意な変化を示さない。GSAの肝集積量は肝細胞数で決まるためと考える。Do', Kuは食事負荷によって13%の有意な増加(p<0.001)を示し、HH₁₅、LHL₁₅と比べ肝血流の変化によって大きく変化し、肝へのGSA摂取の動態をより的確に示す指標であると考えられる。今後検討すべき課題は、疾患例では食事負荷による肝血流の変化でGSAの肝集積が正常例と比較しどのように変化し、肝予備能といかに関係するかを評価することである。

20. 肝移植後の肝胆道シンチグラフィ

山崎 哲郎 丸岡 伸 後藤 靖雄
坂本 澄彦 (東北大・放)

先天性胆道閉鎖症による肝硬変に対して肝移植が施行された患者2例に対して肝胆道シンチグラフィを経験した。1例は生検で慢性拒絶反応の末期像を呈しており肝内胆管の消失と肝細胞の強い障害が認められ、シンチグラフィでは^{99m}Tc-PMTの集積低下と排泄遅延を認めた。他の1例は生検所見は慢性拒絶反応で、グリソン鞘への炎症細胞の浸潤と肝内胆管への多形核白血球浸潤がみられ、シンチグラフィでは^{99m}Tc-PMTの集積は良好であったが、排泄の遅延を呈した。

肝胆道シンチグラフィ所見は組織学的变化が機能面にもたらす変化をよく反映しているものと思われ、本検査は移植後の肝機能の把握や予後の推定に有用な情報を提供しうる検査と考えられた。